
僕は彼女に嘘を吐いている。

佐原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は彼女に嘘を吐いている。

【Nコード】

N5684Y

【作者名】

佐原

【あらすじ】

僕は彼女に”嘘”を吐き、
彼女は僕に”ウソ”を吐いた。

午後三時

午後三時。

窓側の小さなテーブルで
ティータイムをしている彼女。
頬杖をつき、空を眺めていた。

午後三時。

鍵盤の音色が部屋に響く。
傍らにある小窓から
そんな彼女を見る僕。

午後三時。

名前も知らない。

声も知らない。

話したこともない。

向かいの家の彼女が
最近、気になってしょうがない。

僕と彼女の家の真上を

一機の飛行機通り抜けた。
青い空に線状の白い雲が
浮かんでいくのを眺める。

どうも、僕は彼女に

一目惚れをしてしまったみたいだ。

午後三時になると彼女は決まって窓側の小さなテーブルでティータイムをしていた。時折、頬杖をつき空を眺めたりしている。そのたび、向かいの家の二階から彼女を見ている僕は身を隠した。彼女は空に夢中だから見つかったりはたぶんしていないが、いつバレルのではないかと毎日、気が気ではなかったのだ。

彼女を知ったのは一月前。

窓を閉めようとしていた僕は今日のように頬杖をつきぼーっとしている彼女がたまたま目についた。

彼女の中で午後三時のティータイムは日課なのだろう。

毎日毎日、空を眺めて飽きはしないのだろうか。きっと、退屈だ。

僕なら、すぐに飽きてしまうに違いない。だけど彼女は違った。

ただ空を眺めているのではなく、何かを考えているようだった。

僕には彼女が考えている事なんて想像も出来ないけど、そんな彼女をこの部屋から見ているのはなぜか好きだった。

彼女からしたら良い気分ではないのかもしれない。いや、きっと良い気分ではない。断言してもいい。

それでも、僕は唯一、彼女が見れるこの時間が楽しみみたいなものになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5684y/>

僕は彼女に嘘を吐いている。

2011年11月18日05時28分発行